

「若者のための《第九》」 —— クラシック音楽を育てるコンサートの成果と課題 ——

“Beethoven’s Ninth Symphony for Young People”
—— Achievement and Issues of Concerts Which Are Cultivating Classical Music ——

鈴 木 し お り* 上 田 哲**
Shiori SUZUKI Akira UEDA

I は じ め に

クラシック音楽は今どれだけ多くの人によって演奏され、聴かれているのか。これはクラシック音楽に関わる人間にとって大きな関心である。テレビ番組では定期的に放映されているものもあるが、ポピュラー音楽を取り上げた番組に比べるとはるかに少ない。その視聴者は高い年齢層や、クラシック音楽に普段から触れている層が中心であろう。CDショップを見てもその割合は1～2割程度だ。商業的に見ても中心になっているとはいえない。近年は漫画や映画でクラシック音楽を題材にしたものが大きく取り上げられ、「クラシックブーム」と呼ばれる時期もあったが、それも一過性のものであろう。

では、対象を「合唱」に絞ったとき、どのようなことが考えられるだろうか。北海道、特に札幌における演奏曲を振り返ってみると、パレストリーナやバッハ、あるいはメンデルスゾーンやブラームスなど、ヨーロッパの合唱の系譜をたどる作品が演奏される機会は少ない。そのかわり、その歴史とは離れた現代の合唱曲が演奏されることが極めて多い。このような合唱の形を否定はしないが、クラシック音楽の伝統とはかけ離れた現状を近年多く見聞きし、違和感を覚えている。クラシック音楽から新しい音楽に流行が移っているのだ。その傾向が顕著に表れているのが若い合唱愛好家である。

本論文ではクラシック音楽との距離、また愛好家と職業音楽家との関係性を含めた問題を解決すべく企画したコンサート「若者のための《第九》」の開催意義、企画、運営等について触れながら、成果とこれからの課題について述べていきたい。

II 合唱界の現状と本企画開催の意義

1 日本合唱界の現状

日本の合唱界のレパートリーは、この10年～20年で作曲された日本語の曲を演奏する団体がかなり多い。このことは合唱や音楽への導入としては良いことだ。日本語の作品が多く扱われ

* 北翔大学教育文化学部教育学科 ** 札幌文化アカデミー音楽教室

る理由は言葉の問題が少なく、感情も込めやすいと思われるのが一般的だ。人気のある曲であれば親しみやすく、和声や旋律も複雑ではないため演奏しやすい。

そのように合唱の普及に一役買っているそれらの合唱曲だが、クラシック音楽として見るとどうだろうか。多種の作品があり、その意義をひとまとめにできないが、クラシック音楽をグレゴリオ聖歌から始まった音楽、数百年続く伝統としての音楽と定義するのであれば、そこから大きく離れている。

それでは、なぜクラシック音楽としての合唱曲に取り組まなければならないのか。

流行の合唱曲をクラシック音楽と区別して自己満足のためだけに取り組んでいる場合にこの問題は発生しない。しかし、聴衆に音楽とのかけがえのない出会いを生み出そうとするならば、どんな曲を扱う場合でも、数百年かけて積み重ねられてきた音楽の慣習や技法が必ず必要となってくる。

クラシック音楽にはそれでしか学べない形式美、様式美があり、深さがある。そしてバッハ、ベートーヴェン、ブラームスなどの曲は数百年の間演奏し続けられている。そのようにして曲自体が時代に応じて洗練され、熟成していく。良い曲は息が長いのだ。新しい作品が為しえないものをクラシック音楽は為しえるとも言えよう。

もう一つの問題は、札幌合唱界の現状として若い歌手が職業演奏家と共演する、指南を受ける機会が少ないことだ。1980年頃まではプロフェッショナルな指導者、演奏家がリードし、確かなテクニックや知識を愛好家に伝えるという機会が現在と比べると多かったようである。そこからクラシック音楽の深さを知り、自らも歌手として合唱を続けていく人が多かったことだろう。

それに対し現在はプロフェッショナルの世界に触れることが少なくなり、アマチュアのみで音楽を作っているという感がある。もちろん全てがそうとはいえないし、それが悪いとも言えないが、「集まって楽しむ」という感覚が強いように感じる。それも合唱を続ける上で重要な要素であるが、音楽を深めていく上で「必要な条件」を揃えるのは難しい。「必要な条件」とは何か。1つは上述した「楽しみ」という自己の快楽。そしてもう1つは聴衆に感動を与えるという他者の快楽である。その他者の快楽、つまり聴いている人を幸せな気持ちにするために、歌手の知識と技術が必要不可欠になる。

私たちが合唱を一番初めに教わるのは小学校、中学校の授業又は部活動であるが、その場で適正な指導をできる教師が少ないのが現状である。コンクールで優秀な成績を残すような教師であってもベートーヴェン《交響曲第九番》（以下《第九》）をはじめとするクラシック音楽を指導できるほどの経験を積んでいる人材は極めて少ない。その理由は、必要がない、関心がないからだ。コンクールを主たる活動としている場合、賞を取れる曲、過去に他の学校が賞を取った曲に目が行くのはある程度仕方のないことであろう。そして、確かな指導を受けられなかった生徒はそのまま自ら団体を作り、プロフェッショナルの演奏家とほとんど関わりのない中で活動を続けていくことになる。

ではなぜ《プロフェッショナルの指導者との距離》が生まれたのか。原因は一つではないが、重大な要因としては近年の団体数増加と指導者不足が考えられる。

この10年で若い歌手を中心とした合唱団が札幌市内でかなり増えている。かつては中学や高校の部活動としての合唱を終えると、受け皿としての団体が決して多くなかったため、続けることができない時代もあった。また、部活での合唱と、サークルや趣味としての合唱との違いに戸惑いを感じ、やめてしまう人も多数いたと推測する。しかし現在は大学生や若い社会人が積極的に団体を作り、歌手の受け皿ができたため結果的に合唱人口の増加に繋がっている。

ではプロフェッショナルの指導者はどうだろうか。ほとんど増えていないのが現実だ。プロフェッショナルの指導者の定義として、ここでは職業として合唱指導をしている人とする。札幌の合唱指導は主に地元音楽大学で教鞭を取る合唱指導者や声楽家が担ってきた。合唱指導を活動の主体としているのは筆者を含めごくわずかだ。歌手や合唱団が増えて行く中で指導者は増えず、その距離は次第に離れていっている。このことがクラシック音楽を学ぶ機会を失っている一因となっている。

合唱を続けている人にとってクラシック音楽に触れる機会が圧倒的に少ないのが現状だ。将来を見据えて、若い人たちにその機会を多く作りたいというのが筆者の願いだ。

2 「若者のための《第九》」開催の意義

成果の確認や達成感を得るという意味で公演は大切なものだが、練習やリハーサルで長い時間をかけてプロフェッショナルの指導者から指導を受け、演奏家と音楽を共有することでクラシック音楽の深さを体感すること、そして、それを継続することが最も大切なことと考える。こういった機会は札幌では少ない。本当はあるのだけれど知らないということもあるだろう。時間はかかるが、この試みを継続していくことで合唱に対するアプローチの仕方が少しずつ変わっていく。そのことを強く願い、この「若者のための《第九》」を企画・発案した。

Ⅲ 実行委員組織について

筆者が代表となり、専門的に音楽を学んできたメンバーと合唱愛好家7人で構成された。当初は複数の職業音楽家の参加を見込んでいたが、最終的には筆者一人となった。メンバーの内訳は職業音楽家1人、音大卒業生2人（学校教員1を含む）、音大在学生1人、学校教員1人、一般企業従事者2人である。大規模な企画になると運営の比重がかなり大きなものとなる。その中で、それぞれのメンバーが持っているスキルや、学生が持っているネットワークや若い感覚は、公演を成功させる上で大きな力となった。

1 実行委員の仕事内容

この企画を円滑に進める上で、メンバーそれぞれ仕事を分担する必要があった。それらは以下のとおりである。

- ・外部交渉（指揮者，ソリスト，オーケストラ，ホール，企業，札幌市など）
- ・会計（参加者名簿管理を含む）
- ・情宣（チラシ作成，各団体への宣伝，メディア対応，チカホ宣伝イベントなど）
- ・ネット関係（メール管理，Facebook，ブログなど）
- ・助成金対応
- ・広告協賛対応
- …他

IV 参加者募集について

企画にあたって最も重要なのは参加者を集めることであった。曲を成立させる上ではもちろんだが，《第九》という曲の規模，企画そのものの大きさから多数の合唱メンバーを集める必要があった。

1 期間

募集は公演（2016年3月25日）のほぼ1年前から始めた。締め切りは7月末（後に一ヶ月延長）とした。募集人数は170人。対象は15歳（高校生以上）から25歳までとしたが，年齢制限を超える方からの参加希望が多く，上限に余裕を持たせざるを得なかった。

2 参加費，チケット負担

合唱参加者の参加費，チケット負担は以下の通りとした。

	参加費	チケット負担
高校生	1,000円	無し
大学生	2,000円	5枚（学生券1枚2,000円）
一般	3,000円	8枚（一般券1枚3,000円）

できるだけ負担を大きくしたくないということと，プロフェッショナルの演奏家と音楽を作ることへの責任も感じてもらいたいということを念頭に，このような金額設定とした。参加者の反応としては，チケット負担が多いという声も聞かれたが，概ね妥当，もしくは安いくらいだという声が多かった。

3 方法

募集方法としてはチラシを作成し，市内各所に設置（市内区役所，ホールなど）。札幌市内，札幌市近郊の合唱団・吹奏楽団・オーケストラ，高校や大学の合唱部・吹奏楽部等に募集要項を送付した。

当初の締め切り日の時点で応募人数が50名程度と芳しくなかったため，締め切り日を一ヶ月延長することとした。その後いくつかの団体の練習に直接足を運び，直接情宣をした。また，

実行委員が知人にメールなどの手段を使って勧誘した。その結果一ヶ月で100名を突破した。練習開始後も参加を受け付け、最終的には110名を超えた。第九を演奏する人数としては最低限集めることができたが、予算として一番のウェイトを占めているのが参加者の参加費とチケット負担である。予算では170人の参加を見込んでいたため、この時点で予算を大きく下回り、先行きが危ぶまれた。

4 年齢制限の問題

当初、年齢の上限を25歳としたが、その後、年齢制限を緩めることとした。「若者のための《第九》」のコンセプトは多岐にわたり、ただ単に年齢が若い人に歌ってほしいということだけではない。その中にはプロフェッショナルな演奏家との共演、オーケストラとの共演、そして《第九》を歌う機会を今まで持たなかった人の参加ということが挙げられる。結果として年齢制限を超えた参加者は多数いたが、そのほとんどが合唱経験者であり、その存在が若い参加者にとって演奏面でも精神面でも支えとなった。また、財政面や集客の面でもマイナスとなる問題を回避する一因ともなった。

5 練習会場と時期

練習会場は主にキタラ大リハーサル室を使用した。雰囲気も良く、公演のステージであるキタラ大ホールと大きさや響きが近いということで、参加者のモチベーションの向上にもつながった。初回の練習では参加者に《第九》の映像を見て、雰囲気を知ってもらいたいということから、映像機器の整ったエルプラザホールを使用した。公演前日のオーケストラ合わせではオーケストラと合唱が共にリハーサルできる場所として芸術の森のアートホールを使用した。

練習は10月10日を初回とし、ほぼ月2回のペースで行った。合唱未経験者も多く参加することを想定し、発声や楽譜に関する初歩的なレッスンも含めることを考え、回数は12回とした。なお、このうち3回の練習を公演の指揮者である高関健が担当した。これとは別にオーケストラ合わせと当日のリハーサルを実施した。また、発声に改善の必要を感じたため、希望者を募り発声に特化したレッスンを2回開催した。参加者はそれぞれ20名程度であった。2回での改善は微々たるものであったかもしれないが、この企画の中で意義のあるものとなった。

6 参加者の内訳

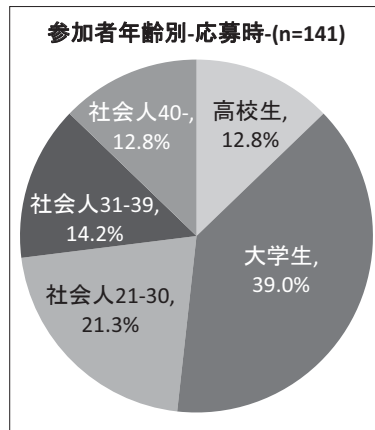
年代別参加者は【表1】【グラフ1】【グラフ2】に示すような結果となった。

最も参加が多かったのが大学生であった。次に多かったのが21歳～30歳の社会人。最も少なかったのが高校生であった。31

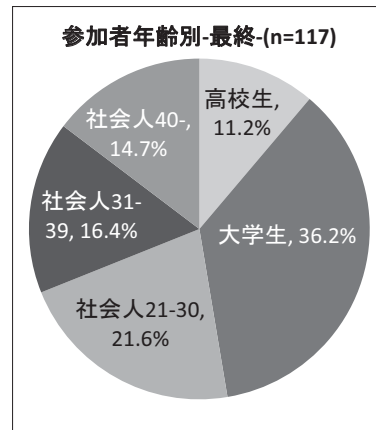
【表1】

	高校生	大学生	社会人 21-30	社会人 31-39	社会人 40-	合計
応募時人数	18	55	30	20	18	141
%	12.8	39	21.3	14.2	12.8	
最終人数	13	42	25	19	17	116
%	11.2	36.2	21.6	16.4	14.7	

【グラフ 1】



【グラフ 2】



歳以上の参加者は合わせて31.1%であった。学生の参加者が多かったのは予想通りであったが、途中辞退者が最も多く、練習参加率も総じて低かった。

結果として7割が30歳以下の参加者となったが、31歳以上の参加者も3割いるということから、本企画に対し、幅広い年代からの期待があることがわかった。

V 財政について

財政は多岐にわたり、収入に関しては多くの困難があった。これらを補完するものとして助成金、応援基金を設定するにいたった。

1 助成金

助成金は3件申請したが、最終的には「札幌市芸術振興助成金」1件にとどまった。金額は目標の1/2程度となり、この先の運営を考えると先行きが危ぶまれた。

2 応援基金

助成金と共に支援を呼びかけたのが「応援基金」である。これは、この公演を個人として応援したいという人に一口3,000円の支援を呼びかけたものである。支援の口数に応じて公演への招待、公演チケットの割引販売の特典を付与した。当初目標を30万円としていたが、最終的には目標をはるかに上回る60万円が集まり、助成金で不足した分や、参加人数が少なかったことによる収入の不足分を補うことができた。

VI メディア媒体への出演、掲載について

メディアへの出演は公演を認知してもらうためには非常に重要であった。活動の内容を【表1】にまとめた。

【表1】

	交渉	出演	放送・掲載時期
テレビ	6社	0社	
ラジオ	AM大手 2社	1社	3月15日
	FM大手 1社	0社	
	コミュニティFM 1社	1社（2回）	12月14日、3月18日
雑誌	1社	1社（2回）	2月22日、3月14日
新聞	2社	1社（2回）	12月1日、3月21日

テレビは出演できればその効果は絶大だが、やはりそれは容易ではなかった。その理由は「コーナー枠が空いていない」というのが主であったが、その裏には「注目度の高さが見込めない」「実績がない」という理由もあるのではないかと推測された。A社からは「名義後援にメディア関係の他社があるため」という具体的理由が示された。他社というのは、テレビ・ラジオ・新聞などのジャンルに関わらずという意味であった。このことがテレビ出演の妨げになっていたとすれば、次回、対象の選定は慎重に行う必要がある。

ラジオは大手AMラジオ1社とコミュニティFM1社（2番組）に出演することができたが、多いとは言えない。これも理由としてはテレビで挙げられたものと近いのだろう。放送後の反応はあったが、大きかったとは言えない。

北海道最大手のアルバイト情報誌では2月中旬と3月中旬の2回、見開きの誌面で取り上げられ、大きな反響があった。雑誌を見ている年代が若年層中心という傾向からチケットの販売に直接反映されたというものではなく、「若者のためのコンサートがある」というアピールとして大きな効果を発揮した。

新聞掲載は大手2社に交渉したが、1社（2回）にとどまった。1度目は練習開始後の早い段階で活動の様子が掲載された。2度目は公演直前に本公演の趣旨や練習の様子が掲載され、直後に大きな反応があった。チケットの問い合わせが主で、予想外のこととして旭川や苫小牧など遠方からチケットの問い合わせがあり、この活動の広がりを認識した。

Ⅶ お わ り に

冒頭では、クラシック音楽の伝統から離れつつある現状への危惧を述べた。今回の取り組みがその改善に役立てたのかどうかは、今後、さらなる検証が必要である。

参加者を対象にしたアンケートは回収率80%という高い割合となり、その回答も肯定的なものが多かった。ただし、それはコンサートに対しての達成感であって、当初の目的であるクラシック音楽への考え方まで至った参加者は決して多くないと感じている。

また、愛好家と職業音楽家との関係性を深めたかったという目的もまだ不十分である。今後、より多くの職業音楽家を巻き込んでいく必要がある。それが長期的に見たときに、クラシック音楽全体に寄与すると考えている。

年齢制限を超えた人からの参加希望、札幌以外からのチケット購入、資金的な応援があったことは、この公演に対する関心度の高さや、応援したいと感じさせる企画であったことが確認できた。また、実行委員が関わる合唱団などからの支援が多く、実行委員個々人への信頼や期待度の高さによる結果だったと言える。音楽を通して、人と人がつながったと言えるだろう。

運営面について。助成金は目標の1/2程度しか集まらなかった。芸術的活動を支援する助成は全国に多数あったが、それを吟味する余裕がなく申請にいたらなかった。その原因はもっぱら実行委員の人員不足からくる動き出しの遅れである。次回は早期から動き出し申請する必要がある。メディアへの対応も助成金と同じく、実行委員の人数や時間の問題から十分な活動ができたとは言えない。人員増員と共に初動のスピードにも改善の余地がある。メディアを含めた情宣活動は、公演の宣伝やチケット販売につながるものであるため、綿密な広報戦略が必要となる。

今まで、必要な機会であったにも関わらず、なかなか企画されなかった今回のようなコンサートを公演できたことは北海道のクラシック音楽の今後にとって大きな成果であると考えている。この活動の実際的な成果は具体的に数字に出るものではないし、その成果が見えてくるまでかなりの時間がかかることだが、この「若者のための《第九》」の継続によってクラシック音楽への関心を強めていきたい。